
カフ流・格言のための斜め読みコウサツ

月野 後歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフ流・格言のための斜め読み「ウサツ

【Zコード】

N4422C

【作者名】

月野 後歩

【あらすじ】

カフの頭を開いて覗いたような、そんなエッセイ群です。「興味のある方は、是非に」一読。

イントロダクション

後歩と書いて、カフと名乗つていろいろですから、俺って、カタカナが大好きなんですね。

だから、考察を「「ウサツ」としたのは、そういう嗜好性によるところも大きいのですが、真意のほどはまあ、まだ説明するには及ばないでしょ。

ともかく、色々の格言について、カフ流の深読みで読み直してみよう、というのが当エッセイの狙いです。

小説家、と文学者、を区別する俺にとっては、これもきっと、文学者向けのものとなってしまうでしょうが、

しかし、ともかくじりあせよ、重要なのは猜疑心だと思つてあります、

だから「」や、昔の文学者の類は世間から軽蔑された、といつものも一つにはあつましょ。

斜に構えるヤツってのは、いつだつていけすかねえものでありますからね。

短いながらの、イントロダクションがありました。

では、参りましょ。

「健全なる肉体に健全なる精神は宿る」

はつきり言いまして、大嫌いな言葉です。

そもそも、何が健全であるかも分からぬ世界にあって、適当にも程がある格言であります、

つまりはそれだけ、この言葉の出来た古代ギリシャと言つものが、平和に満ちていた、ということあります。

といって、ギリシャの頃にも戦争と言つものが存在したのは確かで、プラトンを読んだことのある人なら「存知のことと思つが、有名なところで「ペロポネソス戦争」というものがあつた。アテネとスパルタの二大臣による、大戦争がありました。スパルタは質実剛健たる尚武の国で、昨今までは「スパルタ教育」なんて言葉が使われていた通り、

青年諸君には一定期間の厳しい兵役が課せられておりました。

小説をお薦めするならば、三島由紀夫の「禁色」の全編に、その様子が散りばめられています。

一方、アテネは「知」をよしとする国で、軍部もあつたにはあつたが、これよりは大らかであつたことでしょう。

しかし、軍隊が存在するくらいですから、ペロポネソスは規模こそ全ギリシャを揺るがしこそすれ、その他にも小さな戦争は、いくらでもあつたに相違ないのです。喉元過ぎれば熱さを忘れる、なんて、人間の真理をつきすぎていて、逆に痛々しい言葉がありますが、

それでも、同じ人間です、戦争があつて、「よつしゃ、これからもバリバリ攻めるぞ!」なんて言つヤツはそうそう見られない。

まして、かつての日本人じゃあるまいし、天下のギリシャ人であり

ますから、平和への意識は皆、高かつたれりと思われるのです。

といって、現代の日本を見れば分かる通り、平和になると、今度は一転ノイローゼになりがちで、中々上手くいかないサジ加減であります。

説明が長くなりましたが、そういうわけで、この格言は、こういう時期に発生したものなのではないかな、と、俺は思うのです。だから、嫌いなんですね。

そこで、まず、俺の体験談を載せましょ。

ヶ月前のことでした。

初めの頃は、土壟に賣ども、いか、隣郷に被ての時アビーラード。

を終えますと、今度はレジに入り、

つてしまふ。

三時間もすれば喉が枯れ、

目が乾き、肩が凝り、拳句、

「あ、とにかくどうせ一回は見ておこう。」と、思ふなくなるのである。

滑舌が悪くなるのである。勢いで誤魔化すのが精一杯、うむ、自慢にもなつながら、苦いが故に、元気ごとが資本。

技術も何も、至りませーん、"めんぢやい。" という具合であります。

まあ、モノ力キの性さがで、多少大袈裟に書いた嫌いはあるが、

たかが時給650円前後の仕事なんて、こんなもんだ、というのが、先輩のご意見であります。

しかし、それにも増して重大な危機が迫っていたのは言つまでも無いのです。

何かと申しますに、「達成感」です。

何てことでしきうね、疲労さえもが心地良くなつてしまつのです。仕事終わりには、しばらく顔が緩みつぱなしです。『ああ、楽しかつたな』と、

酷ければ一人、うわ言のように呟いてあるわけです。

嗚呼、いけません。いけません。

……え、どこがどうしていけないかって？

そりやあ、ああた。俺はね、文学青年なんですよ。

堅苦しいところから説明すれば、欲望の基本原則は、欠乏をこそ望む、ということです。

「達成感」とは、つまり、欠乏の満たされた状態に「達成」してい るからこそ、それ以上を望まない点において危険なんですよ。

高慢が嫌われるのと、理由は同じです。

事実、文章を書こうと思えなくなつてしまつましたからね。何故つて、まず、疲れてるのに、書く気なんて起きるはずがないで すし、

そもそも、今現在が楽しいとなると、仕事についてのアレヤコレヤ については思い浮かびこそれ、 創作ノートをまとめる気なんて起きないのが人情です。

大体、不健全なことなんて、考えられなくなつてしまつのです。俺にとつては、欲望云々以上、こちらの方が重要であります。

そう、十全な愉悦に浸つてこると、悪化をする気が起らなくなつてしまつ。

下衆な考えが浮かばなくなつてしまつ。
カフから、下衆（sous）を差し引いたら、一体何が残りまし
まつ？

「甲羅をぬむ」ことは、残酷な描写をほんの少量加えたが、あれは完全に、バイトが休みの日に書いたものです。
仕事といつ、社会に対する奉仕行動を行つてホウホウの体になりながら、

片一方であんな、自己完結の戯画（あることは、「堅実」の正体）を描けるのは、はつきり書いて、
相当、表裏のある、よく書いて出版できるタイプ、悪く言ふば、よ
ほどの悪人なのでしょう。

（だからこそ、サラリーマンをしながら執筆したカフカは凄い、と
も言えるが）

俺は自分について、わざわざ悪ぶつてみた過去もあつたけれど、結局、
残念ながらそんな素養なんてない、と見切りをつけてしまいました
から、

だから、休みの日に執筆するに限るなど。

ウダウダと書いてしまいましたが、つまり、俺にとっては不健全こそが資本なのであって、

肉体を動かすと、ストレスやら何やら、悪魔の秘薬作りの原料が根
こぎになってしまつて、
最悪、心が非常に暗やかになつてしまつ。

母に言われました。「前に比べて、ずっと健康的じゃん」

そうではない。俺はもつと、色々のことを書かねばならない。

恋愛のこと、学問のこと、汚職のこと、精神のこと、ともかく色々
です。

そうなると、どうしても恋愛について欠点を感じなければならない。

綺麗な恋愛を望むのは、童貞か、人擦れしそうたドン・ファンのい
ずれかで、
片一方は知らないがため、もう一方は得られなかつたがために、で
す。

だから、そういう欠点をどーでも良くしてしまつ労働なんて、俺は
認めない。

まして、人類を一定の水準の元、押し付けがましい「健康」なんて
概念に導こうなんて、

俺は断固として、認めるわけにいかないのです。

瓢箪から駒、不健全なる精神からの言葉であります
それでも、「自由」への希求に繋がつたのだから、あながちそう不
健全でもなさそうなのだが、
ああた、いかがお思いです?

「臭いものにフタ」

江戸時代の悪しき慣習として、現代に伝わる「トトワザ」あります。臭いものにはフタをしろ、と。

フタをしないと臭くて仕方がないんじゃ、と。

臭くて仕方ない、近所迷惑も良いところだわ。そうよ、市役所に訴えてやれば……と、

まあ、これは違うにしても、

ともかく、あまり汚いモノに関わりたくないのが人間であって、フタをしてでも断固拒否！ という姿勢がよく表れています。

あるいは、この姿勢こそが「悪」とみなされる由縁であって、臭いものにフタをすると、科学の発展した現代に、メタンガスというものはよく知られたところで、

フタの下にて「臭いもの」はじゃんじゃん腐敗し、かかるガスが充満、いつかは破裂を来たすのである。

大体、押された勢い、強くなつてしまつのは何についても言えたことで、フタが木製ならばまだしものと「ん、

鋼鉄製の、強盗か何から守るんかい、くらい強力なフタを当ててしまえば爆発の威力も凄まじくなつてしまふのであり、

これが糞尿であれば、如何ほどばかり悲惨たるか、想像するだけで笑え……じゃなくつて、想像するだけで恐怖の一言。

何せ、科学と同様にして、ジャーナリズムも発展していますし、翌日には大見出しで「ウ 口大爆発」の記事が載るに違ひなく。

下ネタに走るなど「芸」という長く険しい道においてサイテー極まりないけれど、例を示すならば、某精肉会社の偽装事件がそうであつたのは言うまでもないし、

政治家と裏金の問題も、全てここに帰結しているでしょう。

誰も、まさか、「食べよつと」するものを疑つのならまだしも、一度こなれが、「食べてしまつた」ものを疑うなんて、中々出来たことではないのです。

そういう弱さ、「まあ、大丈夫だらつ」とこつ樂觀的觀測（meatに対する）が、かの社長を傲慢させたのは言つまでもあつません。

フタをする、とは、考えなによつにする、とこつことであるけれど、その実、それこそが相手方（ウーハ）の思う壺なのです。だつて、フタをしてしまつては、じかにから向こつる様子なんて、全く分からぬ。いえ、分からぬぢうのではなくて、むしろ、静か過ぎるとせん思つてしまつでしょ。

フタはそもそも、臭いものを隠しているが故にフタであるのに、これは本当に、忘れるに容易い理屈です。

マンホールを道路の一部のように認識してしまいがちだが、とんでもない、道路の一部のようでいて、結構な深さの穴ぼこなのである。落ちては生半可な怪我では済まないのだが、それも、マンホールがあんまり頑丈だから、すつかり忘れてしまう。

まさか、マンホールが壊れることなんてないんだし、落つこちて怪我をすることなんて考える必要も無いだらう、と。

そうやつて思つてしまえば、いくら意識してみたつてフタはフタ、それ以上の何ものでもありません。

マンホールは「怪我をしないためのフタ」ではなく、道路の一部となり、

「臭いものを覆つたためのフタ」は、何か変な二オイのする板となり、「これは、国内の二コースではないけれど」、「頑丈で茶色い紙の箱」に至つては、何の変哲も無い肉まんとなるのです。

そして、少し話を戻すと、一方で相手方は「考える必要も無いだろ？」「どちらが考えてしまつ」とについては重々承知なんですね。

好き勝手に悪さを働くのです。

果ては、図に乗りすぎた勢いで大爆発、「どちらも、やり場の無い怒りに襲われる。

どうして、「やり場の無い」怒りなのでしょう？

それは、単純なことです。

こちらの勘違いで、「静か過ぎる」と思っていたものが裏切られたのが一つ、

そもそも、その「静か過ぎる」という認識自体が、どうにも俺たちの落ち度だったんぢやねえの？ といつのが一つ、つてか、最初からフタなんてするんぢやねえよ、誰だよ、フタなんてしゃがつたの！ といつのが二つ、しかし、よくよく考えてみたら、そもそもフタをしたのはどうにも自分らしく、ここは大っぴらに怒つてしまつと、自分自身、危ういんぢやね？ といつのが四つ、という具合です。よつて、怒るにも怒れない。

政治家の不祥事なんかに同情的になつてしまつ方というのが、街頭インタビューに登場しないクセ、割と多いような心持ちだが、どうしてそのようになつてしまつのかと言えば、以上の経路でもつて、自らの落ち度を認めてしまつ優しさにあるだらつと思われます。

しかし、それではいけません。

はい、何かの決り文句のようありますが、それでも「ホ、いけない」と言い切つて見せましょう。

まず第一、フタは、すれば良いと思つのです。
取つ払つて良いものではないのです。

「何でやねん。フタなんていらへんわ」

なるほど、確かに、「悪しき習慣」とは、先に書いたことでした。
しかしね、それがどうして「悪」なのか、と言えば、
結局のところ、どうしてフタをしたのか忘れちまう部分、
そこにこそ、悪が悪たる由縁が潜んでいるのではないか。

大体、「無礼講だ！」と、上司に言われたからと黙つて、
調子に乗つて、彼のはげ頭をパツパツ叩き、「なあにが、部長だ！
」の、タコが！！

アハハハアと笑つた口にや、青筋立て怒鳴られるのに相場が決ま
つているのです。

建前を、そのまま鵜呑みにしようとする傾向が、日本人にはあるら
しい。

そしてまた、その、鵜呑みこそ、美德のように思われている。

しかしながら、難しい話をしてみると、自我とこゝのは一重化されて
いて、「彼のことを信じてるのー」という主觀があるかと言えば、
一方にして、

「私は、彼の実際を知つてゐるが、それでも、建前を信じてやう。

へッ、なんて美しいのかしら、私」という客觀も存在するのである。

だから、言葉と言つもの、易々と信じてはいけませんよ。

「臭いものにフタ」

なるほど、臭いものを隠す、といふこと。

しかし、ともかく、何故隠すのかを、知つてゐる。

この前提がないことには、即ち悪となりましようし、

また、礼儀も何もあつたものではなくなつてしまふのです。

「臭いもの」フタ（後書き）

——コースが若干古めの感じ、お詫び申し上げます——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422c/>

カフ流・格言のための斜め読みコウサツ

2010年10月16日14時23分発行